

茶園の整枝残さ利用による窒素施肥量の削減

農業技術振興センター - 普及部

【普及活動のねらい・対象】

茶園のうね間には、刈り落とされた枝葉が堆積（整枝残さ）し、うね間に施用した肥料が直接土壌に到達しない状態となっています。

そこで、肥料効率を高めるため、深耕によりうね間土壌の環境を改善し、整枝残さを有機物として有効活用することで窒素施肥量の削減につなぐ技術の実証を行いました。

【普及活動の成果】

うね間に堆積した整枝残さを深耕により土壌中に鋤込んだところ、6カ月間で約50%の整枝残さが分解され、うね間土壌中の無機態窒素量が約10mg/乾土100g増加したことがわかりました。

深耕により土壌条件が改善されたことで、深耕区の窒素施肥量を62kg/10a年と慣行区より8kg/10a減らしたところ、荒茶収量ならびに荒茶成分、販売単価は慣行区と変わらず同等の評価が得られました。

深耕作業は、夏場の厳しい条件下での作業のため、実演により深耕作業の普及を図ったところ、本年度から、新たに4名の農家が深耕を実施し、うね間土壌の環境改善に取り組まれました。

深耕作業は5年に1度の間隔で行いますが、次年度からは、施肥位置をうね間だけでなく株下まで広げる全面施肥技術を取り入れ、更なる肥料の効率的利用と荒茶品質の向上に取り組む計画をしています。

表 荒茶収量ならびに荒茶成分、荒茶評価の比較

茶期	試験区	荒茶収量 (kg/10a)	全窒素 (%)	遊離アミノ酸 (%)	荒茶評価 (円/kg)
一番茶	深耕区	98	5.22	3.05	1,650
	慣行区	96	5.18	3.01	1,630
二番茶	深耕区	100	4.38	2.56	888
	慣行区	97	4.36	2.52	902



うね間に堆積した整枝残さ(深耕前)



深耕作業の実施風景
(作業時間：100分/10a)



深耕直後のうね間の状態